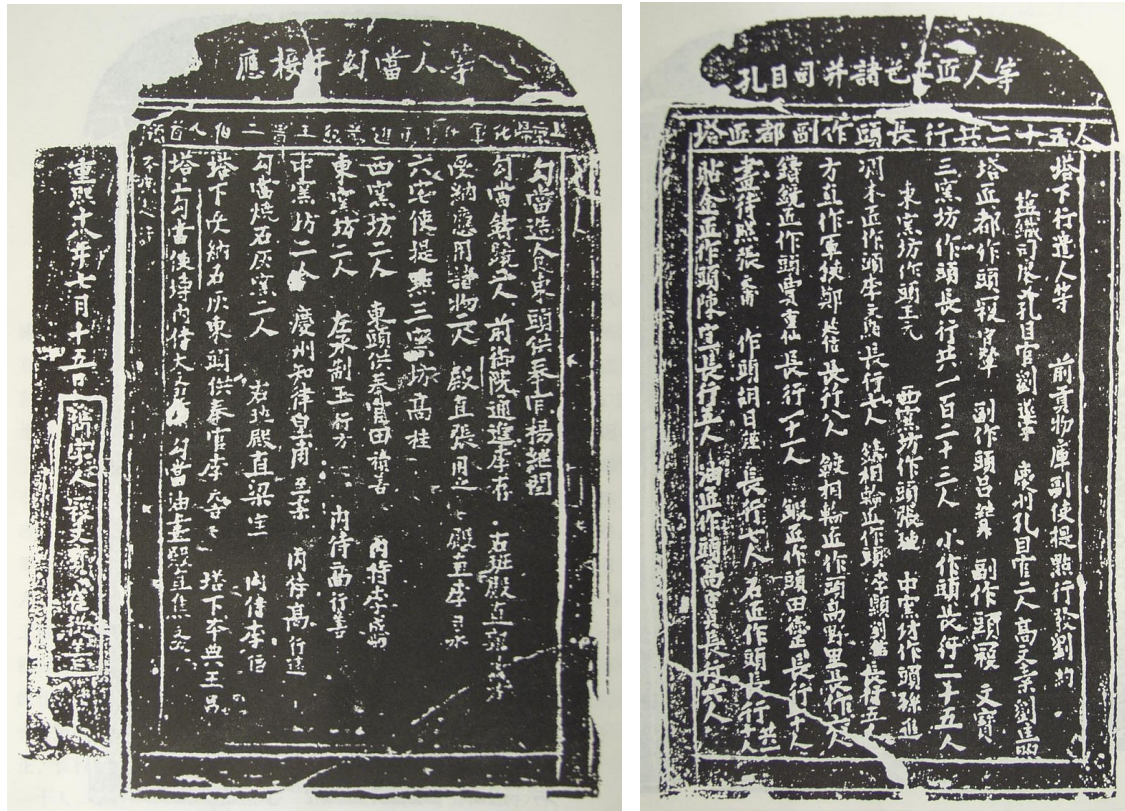


遼代碑文の左横書き漢文について

中村雅之

1. 十一世紀の横書き漢文

蓋之庸 2002:385-388 に「慶州圓首建塔碑銘」と題された資料が紹介されている。遼の重熙十八年(1049)のものである。



この碑文で目を引くのは、最上段の文が左から右への横書きになっている事である。碑陽(画像左)では、最上段が左から「應接手勾當人等」と記され、二段目は右から左へ「上京帰化軍什将馬進、節級王貴。二伯人首領本典趙諫」とある。<sup>1</sup> ただし最後の「本典趙諫」は縦書きになっている。

一方、碑陰(画像右)では、最上段が左から右へ「孔目司并諸色工匠人等」とあり、さらに二段目も左から右へ「塔匠都副作頭長行共二十五人」とある。つまり、碑陽は一種の牛耕式(左→右、右→左)であり、碑陰は一段目、二段目ともに左から右への横書きになっている。かなり自由な配列とすべきである。

2. 漢字表記史の中で

漢字の配列が右縦書き(すなわち縦書きで行が右から左へ進む)を基本とすることは三千年来の伝統と言って差し支えあるまい。甲骨文には左縦書き(行が左から右へ進む)も見られるが、周代以降はほぼ右縦書きで一定している。額の題字などで右からの横書きに記されることもあるが、そ

<sup>1</sup> 文字の判読と句読については蓋之庸 2002 を参考にした。

れは一行が一字からなる右縦書きと変わらない。

吉池孝一 2007 には、元代に左縦書きされた漢文が二種紹介されている。一つは『蒙古字韻』の中の劉更と朱宗文による序文(1308 年)で、双方ともに左縦書きである。もう一つは「特贈鄭鼎制誥」と称される皇慶元年(1312)の皇帝聖旨を刻した碑文で、上にパスパ文字、下に漢文が記され、共に左縦書きである。これらはパスパ文字の書記法に合わせたために左縦書きという珍しい配列になったものと考えられる。なお、吉池氏は現代の『八思巴字蒙古語文獻彙編』(内蒙古教育出版社、2004 年)でも、漢字漢文の一部が左縦書きで書かれていることを指摘している。パスパ文字やウイグル文字など、左縦書きの文字とともに記すには漢文も左縦書きにする方が便利なのであろう。

問題の遼代碑文に目を転じてみよう。この碑文には漢文のみが記されており、チベット文字やインド系文字のような左横書きの文字に影響されたと考えることは難しい。遼代に作られた契丹文字も、契丹大字・契丹小字にかかわらず漢字と同じ右縦書きであるから、これらの影響とも見なし得ない。しかも最上段は碑陽・碑陰ともに左横書きでありながら、二段目は碑陽が右横書き、碑陰が左横書きと一定していない。また、意味の切れ目を無視して改行がおこなわれている部分があり、<sup>2</sup>あるいは字句をそろえたり頭韻を意識しているとも疑われる

この碑文は塔の製作にたずさわった官員や職名を記したもので、本来は非規範的な配列も修辭的な作業も不要と思われるが、逆に、無味乾燥な内容であるからこそ、“遊び”として風変わりな配列を試みたのかも知れない。

参考文献:

蓋之庸 2002, 『内蒙古遼代石刻研究』, 内蒙古大学出版社.

吉池孝一 2007, 「漢字とソグド系文字」『KOTONOHA』60 号.

---

<sup>2</sup> 例えば、碑陽の二段目から粹内本文(右縦書き)にかけては、蓋之庸 2002 によれば、以下のように区切れる。「上京帰化軍什将馬進、節級王貴。二伯人首領本典趙諫勾當。造食東頭供奉官楊繼閏勾當。鑄鏡二人……」